

707 漫録（矢野恒太・相互主義に就て）

〔『法学新報』第32巻6（366）号 大正11年6月5日〕

漫 録

○相互主義に就て

本篇は中央大学商学会主催の講演会に於て矢野氏の試みられたる講演の速記にして同氏の訂正を請ふて爰に掲載することとせり

第一生命保険相互会社社長 矢野 恒太

今日此壇に起つの光榮を与へられた事は有り難く存じます、先達天野さんが御出下すつて是非此所で何か御話をするやうにとの事でありましたが、私はずつと前に此学校で講義をした事がありました、一体皆さんの前で講義をするやうな学問もないし、教育の事とは多年離れて居りますので御断りしたのでしたけれども、どんな話でも差支ないから是非間に合せるやうにと云ふ学長からの命令で、拠所なく出たやうな訳で何を御話して宜いかと云ふ考もなかつたのであります。所が来て見ると実業講話と云ふ標題が掲げられてあります

実業と云ふ事に就いては別に御話する事もありませぬが、私は相互保険会社と云ふものを遣つて居ります、此相互主義と云

ふ事に就いて少しばかり御話をして早速に引込みたいと思ふのである、是ならば自分の商売^{ツマ}みたやうな事でありませうから之を皆さんに伝える事は間違なからうと思ふのであります、近頃は御承知の通り随分言論が盛んでありまして、私は兼ねて著述に於て「言論遊戯」と名けて居るが、余程真理から外れて居るやうなもの世の中には大分多いのであります、此頃現はれる沢山の著述、言論だけでも私は自分の専門に関する事だけは読んで見るが、詰らないものを買つて読んだと度度舌打をせんければならぬやうなものがある故に私は有益でなくても有害でない位な話をして見たいと考へて居るのであります

此相互主義と云ふ事に就いては何も之を歴史的に或は学理的に彼此御話するではありませんせぬ、又さう云ふ暇もありません、皆さんが聴いて面白いと云ふ事もありますまいが、私の立場からして相互主義と云ふものに就いて一つ聴いて貰ひたい事があるのであります、それは恐らくは私にして始めて皆さんに斯う云ふ事を言ひ得ると自分から考へる事を自信を以て御話をするのであります、大層効能書きが偉いけれども其積りで聴いて頂きたいのである、相互主義を日本へ輸入しましたのは現中央大学の岡野博士であります、私が岡野博士と相識つたのも此事が縁故であります、私は始に少し自分の身の上話をしなければなりません、自慢臭くなるといけませんけれども手取早く申し上げますが、私は元来小学校より以上普通の学問を修めた事はないのであります、併し医学校を出て医者^{イサナ}の免状だけは持つて居る、度度後藤新平さんと矢野恒太とが医者であつたならば

などと云ふ問題もあります従つてまだ人殺しの許可証だけは持つて居るが、人助けの為には医者は遣らないだけの話、其医者が縁故で保険事業に従事して、始めて日本の当時の保険事業を見ると悉く営利的の会社である、被保険者から集める所の金は悉く之を利用して得たる利益は悉く株主が取つて居る御承知の通り生命保険と云ふ事業は僅かな資本があれば出来る、十万^{マン}が二十万^{マン}か払込んだ金は唯積んで置くだけ其金は利子を産む、其外に保険から集めた金を利用して、是が予定以上の利益が生ずると其利益は幾らでも株主が取る現に私が始めた第一相互の实例を取つて御話をするに僅かに二十万円の資本で、五万円の払込を以て始めた、それでどの位利益があるかと云ふと此頃は毎年百万円位の利益がある、此百万円を五万円の株主が悉く取つて仕舞ふと云ふ事は正しくない、之は何とかせなければならぬ、さりとて是が利益が出ないやうに安くして仕舞ふと、ヒヨツと流行病が襲来して来るとか、戦争があるとか云ふ事になると支払に困つて仕舞ふ、会社は一年や二年ではなく数十年も先迄契約して置かなければならぬのだから、此位で沢山だらうと思つて三分とか四分とか計算に置いたものが、さう参らないと予定の金を出す事が出来ない、そこで十分に取つて置かないと危ない、併し十分に取つて置いて剩つたものを株主が取ると云ふ事になると、之は又株主が余りにとり過ぎる、之は何とか方法がありさうなものだと云ふ考から、少しばかり独逸語が読めたのを幸ひ独逸から書物などを取つて調べて見た所が、西洋には純営利的の会社と云ふものは独逸は勿論英国にも亜米利加に

も仏蘭西にも殆ど何処にもない、全世界に唯僅かに日本に在るばかりである、純営利的の会社はワールド、イングリツシユ、システムと云ふので、昔英国に斯う云ふ方法があつた。被保険者から契約の保険料を取つて、それに依つて生じた利益は皆株主が取つて仕舞ふ、斯う云ふ風に出来て居る、それはどうも良くない、之は何とかしたいものだと思へて居つたのであります、それが元になりました、自分は其保険会社の医者をして居つたのですが、其所を退くやうになつて、明治二十六年に非射利主義生命保険会社の設立を望むと云ふ小さなパンフレットを出した、さうしてそれ以来保険界に這入つて来るやうになつたのであります、どうしても法律が相互会社と云ふものを認めない限りは矢張株式会社か合資会社で保険会社を造るより仕方ない、そこで合資の保険会社を造つて暫く従事して居りました、之は安田さんが私に依頼して造つたので其済生命保険合資会社と云ふので今は此会社は株式会社になつて居る此会社を自分が支配して遣つて見たが何分不安に堪へいから、之は一遍西洋へ行つて斯う、沢山金を使つて経営して行つて行くか行かぬか本當に調べて見たいと云ふので、遂に独逸国に留学したのであります、其時に始めて独逸の伯林で岡野博士に御目に掛つた、私は今日でも講師が間に合はぬとすぐに呼出される位であるから、実のある話は出来ませぬがおしやべりである、無遠慮に保険の講義などを遣つた為に独逸に居つた岡野博士などに「保険」と云ふ綽名を附けられて仕舞つた、岡野博士はどうかして相互保険の事を日本の法律に入れたいものだと思ふので唱

へても居り考へても居られた、そこで岡野博士は僕は法律の方から調べるから君は實際の方から調べて呉れと云ふので当時私は農商務省の囑託をも受けて居つたので、独逸で一番古いグーターと云ふ保険会社に官命を以て這入る事になりました、始めは一年ばかり見習に這入つて視察をしようと思つたのですが、能く考へて見ると斯んな馬鹿な事はない工場とか何とか云ふものならば行つて見さえすれば分るが、保険業などは視察ではちつとも分らない、建物や机などを見た所で少しも分らぬので、中へ這入り込ませると云ふ事を談判した所が、官命ならば入れて遣ると云ふので時の日本公使館に居た、青木と云ふ公使が公然掛合つて、日本政府の依頼に依り留学すると云ふ事でグーター会社に這入り各課の事務を執らして貰つたと言へば気が利いて居るやうであるが、独逸語も碌に出来ないから随分困難をしたが、此処で實際事務を執つた結果、其遣つて居る事を見て、他の会社ではどう遣つて居るかと思ふ事を質問するだけの智識が初めて出来て来た、そこで日本に歸つて来て自分の思つて居る会社を造らうと思つたが第一法律がないので、さうは行かなかつた、岡野博士は農商務省の勅任参事官になられると同時に法典調査会の方の起草委員になつて居られたが農商務省の保険業法を書かなければならぬ、保険業法と云ふのは今日行はれて居る法律であります、之は一方には保険事業の取締と云ふ公法的規定を掲げ、一方には相互会社の組織に関する私法的規定を書く、其二つを合したものを法律にして、之を保険業法と言つて独逸などでも実施して居る、さう云ふものを一つ拵へる

と云ふ事であつた、所が法律の方は岡野博士が居られるから一向差支ないのであるが、計算上のことであるとか営業上の実際であると云ふ事に就いて、是非私に這入つて貰ひたいと云ふ希望が在て、到頭私が農商務省に這入つてから暫く役人を遣つたのであります、私は元魁を持つて社会に立ち中途から前垂を掛けて商売人になつて居つたのが今度は役人になつた、然し高等文官試験と云ふやうな資格もないし、さう云ふ力もないのでどうも高等官にする事が出来ないと言ふので、暫く囑託と云ふので這入て居つた、さうして起草事務に携ると同時に其時分の保険事業の監督みたいな事を遣つた、併し法律のない監督ですから唯私は農商務省に居つた位のもので、其後取締事務が法典調査会に移つたのです、保険業法は岡野博士や田部博士、梅博士などが起草委員となつて、私が其補助員と云ふやうなものになつて御手伝をする事になつた、法典調査会の方でも私は此処の岡野学長さんとは殆んど親子の如くくつついて歩いて来たのであります、さうして漸く保険業法と云ふものが出来て、之を議會に出すと云ふ事になつた、議會へは私は出ないでも宜からうと思つて居つた所が、矢張計算上や實際上の事に就いて必要があるといふので、矢張政府委員になつて議會にも出る事になつた、其法律が通過して其後外国保険会社に関する勅令の起草に携つたり色々な事がありました、明治三十三年法律第六十九号保険業法が出来た為に農商務省の商工課の中に保険課と云ふものが出来て其の保険課の課長に是非なつて呉れなければ困ると云ふ事であつた、併し高等文官試験とか何とか云ふ資格のな

い者を課長にする事は出来ぬと云ふ事になりました、非常に衝突を致しました、私は勿論保険業法さへ出来ればすぐに民間に下つて相互会社を遣りたいのだから、そんな事は遣りたくないと言つた所が、子供を産放しにして乳放れもしない中に逃げて仕舞はれては、何が何やら薩張分らなくなるではないか、せめて属官が一通り覚える迄はどうしても居て貰はなくは困る、今すぐに高等官にする訳には行かぬが、まあ、何とかするからと云ふ訳で、私は到頭特別の事情で高等官にして貰つて、さうして高等官六等になり正七位と云ふ位を附けられました、今日迄私は正七位であります(笑声起る)正七位になつたのは実に有り難いものであります、私共の友達は皆出世して仕舞つて、正三位とか従三位とか勳二等だとかなつて居るのに、正七位だけで勲等なしですから、仲間へ這入ると随分肩身が狭いです、併し之は自分が学問をしなかつた御蔭で已むを得ない、其後一通り日本の保険会社の検査などを致し、丁度明治三十四年十二月に官を辞し第一相互生命保険会社と云ふものを日本に始めて拵へたので、是が日本に相互会社と云ふものの出来た始めであります、相互会社は申上げる迄もなく株式組織のものでなくして、所謂保険に這入る人が互に寄つて遣る丁度一種の信用組合みたいなものであります、保険の欲しいと思ふ者が金を出し合せて、其の中から幹事を拵へて世話をさせて行くと云ふ一つの会でありますで金が足りなければ会員から追徴する、金が剩れば之れを会員に戻すと云ふのが原則であります、日本では岡野博士とも相談をして、追徴させると云ふ事になると

日本の相互会社の發達に余程支障を来すだらうから追徴だけはしなくてもよい事にしやうぢやないかと云ふので、有限責任の相互会社を拵へる事が出来ると云ふ法律で保険料を払込んだ以上には追徴されないものも出来ると云ふ事になつて居る、兎に角株主が金を儲けるのでなく、金が剩れば会員に戻す足りなかつたならば、有りたけの金で払つて行く、例へば一千円払はなければならぬものを九百円に減すとかして責任を終るので、別段誰も金を儲けて行くのではない相互会社はさう云ふ事で出来て居るのであります、尤も追徴をする相互会社を造る事も出来るが、之れは今日迄一向出来て来ない、斯んな事は私が改めて説明する迄もなく、諸君は平素の論議で能く聴いて居るだらうと思ふ、少しも資本なしで許す事になると危険ですから法律は相互会社にも資本を要求して居るそこで私共は二十万円の資本を狩り集めて五万円払込で始めたいのであります、此二十万円の資本を狩集めるにはどうするかと云ふと、ちつとも当がない、本人は官吏の上りでありますから、金はちつともない、そこで色色の有力な方に頼みました、それには岡野学長なども非常に助力して下さいまして、有力な人人に話をして頂いた結果、まあ矢野さんが保険課長を辞して模範的のものを造ると云ふならば寄附を致しませうと云ふ様な訳で、寄附の積りで富豪連が少し宛金を出して呉れたのであります、漸く五万円と云ふ金が出来たが、其中から上草履も買はなければならぬ机も買はなければならぬといふわけで日本橋の新右衛門町に家を借りて開業したのであります、それから例の相互主義で遣らなければ

ならぬと云ふので極力相互主義を主張して来つたのであります所が一向世間に反響がない、口では旨い事を言ふがそんなものが出来るかな、旨く行つたら這入つても宜いとか何とか云ふので中中加入者がいない、一年に漸く百万円宛の契約を得る事が中困難でありました、それが開業以来今日迄丁度二十年目で、九十九年と半ばかり経ちましたが、今日では一年に四千万円位の契約が出来る様になつたのであります、^今す今日では段段と相互会社と云ふものも世間から認められ財産も漸く千八九百万円程集つて来た、始めは五万円が非常に大金であると思つたのですが、其時代から想ふと確かに隔世の感があるのであります、是迄は僕の会社の広告と思つて聴いて宜いが、是からは愈々本論に這入つて来る。「どうもあなたの会社を見ると云ふと既に資金は消却して仕舞つて、一厘の資本もなければ一人の株主もなく、保険の欲しい者が相集つて、あなたを幹事長に推して、あれだけのものが出来て居ると云ふ事は実に面白い組織である、如何にも合理的の組織であると思ふ、総ての事を斯う云ふ風に改めなければいかぬと思ふが、物品の販売と云ふやうな事も斯う云ふ風に出来ないだらうか、それに就いて一つ大に説を聴きたい」などと云ふやうな人が飛込んで来たり、何かして僕に賛成を得て、あはよくば何か一つ会でも起して自分が總裁にでもならうと云ふ人があるのです。それから近頃信用組合と云ふものが大分流行して来まして、商売人が非常に儲けていかぬから購買組合を起して大に品物を原産地から取寄せて、所謂中間の仲買階級を無くして仕舞つて、生産者から需要者へ直接

に販売すると非常に安くて、さうして誠実に商売が出来る、さう云ふやうな購買組合を盛んにせにやいかぬと云ふので、何でも此信用組合の方を奨励して居られると同時に購買組合の熱心な信仰者がありまして、購買組合の本なども出来て居ります、又或人は私の所へ遣つて来て、あなたは購買組合を必ず賛成すると思ふ、あなたの遣つて居る事は、即ち保険の購買組合と言つても宜いのだから―甚だ勝手ながら活動写真を映写する都合上暗くなる迄講演を願います―只今斯う云ふ書き付が来ました……此信用購買組合が宜いと云ふ事を頻りと説かれるのであります、私も此購買組合と云ふものは概略知つて居る、自分でも多少経験もあるが、其人の言はれるには自分は労働者の購買組合を組織して居るが非常に都合能く行つて居る、自分は^自自分の関係して居る組合に属する労働者の為に非常に安き物を供給する事が出来て大変都合が宜いから、之を全国へ大いに拡めて一般の商工業者を指導して暴利を貪る者の遣方を改めて遣りた、今日は非常に物価が高く暴利取締令なども十分に行はれないやうだから、此方から大に攻めてやらうと思ふから僕の事業を賛助して貰ひたいなど、説教に來られる人もある、是等は僕が非射利主義の生命保険会社の設立を望むと云ふ宣伝を遣つた時代の僕の思想から行けば一も二もなく賛成するのであります、近頃年を取つて能く考へて見ると、どうも終局さう云ふ事になるのが善いのか悪いのか考へ物である、自分の遣つて居る相互保険と云ふものも保険に就いて言へば総ての保険業と云ふものは皆株式組織の保険会社を罷めて仕舞つて相互組織の会

社にするが善いか悪いかと云ふ事を考へて見ると、私には「ノウ」と云ふ答が出て来る、此処が僕でなければ言へない所である、私が今日迄岡野博士などの助力を得て主張して來た相互保険は終局の目的ではない、少なくとも株式組織の保険会社と相互保険と並べて存して行かうとも株式組織の保険はいけない、相互保険に限るのだと云ふ理窟はどうしてもないと云ふ事に議論が帰着するやうに思はれる、其理由を少し話して見たいと云ふので是だけ長い前置を話した訳であります。前の色色な物品販売を相互保険と同じやうな組織で遣りたいと云ふ或人の説なども、後の労働者の為に購買組合を造りたい、造つて其結果が善いから吾吾の事業を賛助して呉れと言はれるのも同じであるから、是も一緒に引括めて批評しても宜いのであるが、第一の如きは是から遣らうと云ふのだから遣つた結果が善いか悪いかわらぬが、第二の如きは頭の善い人格も善い人らしい其人が労働者の為に労働者に必要なる米炭其他のものを供給して居る購買組合の結果は斯の如く善いものであると云ふ事を示されて、さうして英書などを持つて来て、英国には斯う云ふ大きな購買組合がある、又其数も沢山ある、それから白耳義のブラツセル市には労働組合の本部があつて、其所でも非常に大袈裟な購買組合を遣つて居る、さうして全国に支部を置いて盛んに遣つて居るさう云ふものなどの事を色色御話がありまして、斯う云ふ風に各人の生活の資料を供給して遣らなければならぬ、商売人の手を通して色色のものを用もないのに買つて置くと云ふ事は、それを買ふと云ふ為に外の仕事をしないから國家の為にも

損失になる故にさう云ふものを略して仕舞つて生産者から直接に購買組合に持つて来て、其購買組合から直接に販売して需要者に与へる事が出来たならば其間で唯取次をするだけで飯を食へて居つたものが、他の必要なる生産事業とか、有益なる事業に従事して国益を増す事になる、だから現時の経済組織は善くない、どうしても購買組合を造らなければならぬと、斯う云ふ風な議論をされたのでありますが、私は此議論に反対なのであります、現に諸君の父兄の中には東京に在る購買組合の中に這入つて居る人もありませうが、如何様購買組合に這入つて居れば普通の店で買ふよりは、近頃のやうに商店の売値が非常に高くなつて来ると幾分か安い、幾分か安いけれども其代り品物が少なくて選択の自由が利かない、之れから買ふにも普通の商店ならば一寸電話を掛ければ品物を沢山に持つて来るから自由を選択して買へる、又店へ行けば非常に豊富なる品物の中から選択して買へば後から届けて呉れるが、信用購買組合であると非常に必要な生活品の米や炭のやうなものでも注文の葉書を出してから三日も経つても中届けて呉れない、さうして其届けて呉れる物も勝手に注文すれば或物はあるが、或物はないと云ふ状態である、然らば之を普通の商人が遣るやうに非常に完備するやうにしたらば今の購買組合が普通の商店よりも非常に安く行けるかどうかと云ふ事は能く考へて見ると余程むつかしい問題である、それから労働者の為に、或小さな組合を拵へて其結果が非常に宜いと言つて献身的に働いて居る此人が、若し力働相当の俸給を取つて之を遣つて貰つたならば其購買組合の

ものは非常に高い物になる、さう云ふ人が唯献身的に自分の生活と云ふものを犠牲にして働いて呉れるから非常に安い物になり非常に善い結果が得られるのである、そこで君が若し何百円とか何千円とか云ふ月給を取つたならばどうかと云つて聴いて見た所が、さうしたのでは此組合は逆も立ちませぬと云ふ然らば君が一人で働ける範囲内では宜しいが、例へば君の購買組合が段段大きくなつて全国に拡げなければならぬと云ふ事になると君一人で各地で原料の買出から販売迄を遣る事が出来ないから、矢張君と同じやうな人間を高い金を出して使はなければならぬ、併し此信用組合なり購買組合なりに従事する人間は之は公益的事業であるから安い給料で働けと言つて圧迫する事は出来ない、公益事業であらうが何であらうが其人の力働に相当するだけのものは遣らなければならぬから、营利的の会社として遣るのも購買組合として遣るのも何処が経費や何かの上に違ひがあるかと云ふ事を考へて見ると、殆んど私の頭では違ひがあると云ふ事を算出する事は出来ない、購買組合の事務員として一万人の人を使つても三越呉服店のやうな普通の商店の事務員として一万人使つても其費用は同じだらうと思ふ、唯自分の手の届くだけの小さな組合を拵へて月給を貰はずに遣つて居るが為に品物の安いのが出来るのでは之は共に天下の経済を論ずるに足る人ではないか、相互保険の事も亦同じであります、相互保険と株式保険とどう云ふ風に違ふかと云ふと、前申したやうに五万円の資本を払込んで百万円の利益が上る、百万円の利益が上るとそれを皆株主が取つて仕舞ふと云ふ事が世間一般に行

はれて居る保険業である、此利益を減ずると云ふ事が出来なければどうしても相互保険と云ふものを以て之を矯正して行かなければならぬ必要が起つて来る、相互保険と云ふものは必ずしも利益分配だけではないのです、総ての被保険者即ち契約者が自分で其会の政治に参与する権能を有つて居ると云ふ事が株式会社とは違つて居るのだけでも、それよりも相互保険と株式保険との実際的問題となるのは利益の分配の問題である、所が西洋諸国の实例を見ると、チャールドイングリッシュシステム、ミチアルコンパニー、ミキストコンパニーとがあるミキスト云ふのは合の子会社で、金を儲ければ被保険者にも利益を遣る相互会社と営利会社の丁度中間を行つたのがミキストコンパニーで、此ミキストコンパニーと云ふものが西洋諸国に行はれて居るのであります、今日では相互保険とミキストコンパニーとが天下を両分して生命保険事業は持つて居るのである、火災保険には独逸の一部に相互組織のものがあるが、火災、海上其他の保険には相互的の方面は余り発達して居ない、之は期間が短い事や其他の理由に依るのであるが生命保険は先づ天下を両分して相互会社と合の子会社とで営業をして居ると言つても宜いと思ふ、合の子会社の方は法律上の形態は株式会社であるが営業上の形態は相互主義を採用して居るものである、明治二十五六年頃私が始めて調べた所では外国には混血会社か相互会社より外はないので純然たる営利会社と云ふものは一つもない、其時に日本には純然たる営利会社より外なかつた、故に之は日本の状態を矯正する為には相互組織を持つて来なければならぬ、さ

うして相互主義を注入しなければいかぬと云ふ事を岡野博士も考へたらうし自分も考へたのであります、併し若し此形勢が逆であつて日本には相互会社より外ない皆会員組織のものばかりであつて、営業的の保険会社と云ふものが一つもなかつたとしたならば、恐らくは矢野恒太は株式組織の生命保険会社を拵へる事を唱道したらうと思はれるのであります、之は何も新しい事を言つて人氣を博してどうかしやうと云ふ野心ではないのであります、之は若し、所謂僕等にも青春の血に満つると云ふ時代があつたのだから、實際斯うなければならぬと考へたのである、と云ふのは如何に此株式組織と相互組織と違ふかと云ふ事を少し申上げて見たいと思ふ、之は何も保険ばかりでやない、^(マツ)彼の購買組合と商店でも同じ事でありませう(以下次号)